



Nomen Actionis 試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 亨 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000883

Nomen Actionis 試 論

金 子 亨

北海道学芸大学釧路分校 第二外語研究室

Tohru KANEKO : Zum Nomen Actionis

Das Nomen actionis ist eine grammatische Erscheinung, die man erst dann richtig verstehen kann, wenn man, statt es innerhalb der einfachen Formenlehre oder der Satzlehre im engeren Sinne zu beobachten, seine „misch-syntaktischen“ Beziehungen in Betracht zieht.

Die Nomina actionis werden zwar in den meisten Fällen aus Verben abgeleitet, doch sind alle aus Verben abgeleiteten Substantive keine wirklichen Nomina actionis. Die Substantivierungsprozesse, in denen aus Verben verschiedenartige Substantive gebildet werden, lassen sich in drei Stufenfolgen einteilen: (1) die erste Stufenfolge der Substantivierung, in der sich die wirklichen der Bezeichnung lebendiger Tätigkeit dienenden Nomina actionis ergeben, (2) die zweite, in der sogenannten Abstrakta für Tätigkeitsvorstellung entstehen und (3) die dritte, nämlich die letzte, in der sich Nomina substantiae für die Dingbezeichnung befinden, in der die Substantivierung vollkommen abschliesst.

Wird das Nomen actionis mit einem Artikel, einem Pronomen oder einem Adjektivum begleitet, nämlich mit irgendeiner Bestimmung, die eine Subjekt-Prädikat-Beziehung darstellen oder andeuten kann, so könnte man mit Recht solches Nomen actionis einen substantivierten Satz nennen. Der Verfasser beabsichtigt aber, darüber später zu sprechen.

1.

本稿でいう Nomen actionis (以下 NA と略称する) の概念には、さしあたり次の規定を採用しておく。

Die Verbalnomina¹⁾ zeigen förmliche und syntaktische Eigenschaften des Nomens und Verboms. (M. Regula)²⁾ この規定において、若干の保留を附すならば³⁾ NA の概念は、基本的に正しくとらえられている。すなわち、NA は、語形的には Nomen として、且つ概念的には Verbum としての特性を有するものとされる。ただ、この場合に、Verbum としての概念は、動詞概念一般が、an und für sich に具象的に実詞化されると考えなければならない。つまり、大別して、動作 (Tätigkeit)、過程 (Vorgang)、様態 (Zustand) 等の動詞の概念が一個の表象として、名詞的に意識されるのであつて、いわば、NA は、動詞的概念様式 (Begriffsweise) を有する名詞と考えられなければならない。従つて、名詞とか動詞とかの範疇が、本来語形論 (Wortlehre) のカテゴリーであるとするれば、NA に関する問題はこのカテゴリー内では、とうてい処理し得ないのであつて、そのためには、意味論 (Bedeutungslehre) の諸カテゴリーとのかね合いが必須となる。

たとえば、一般に動詞派生名詞が NA 形成の母体をなしているのであるが、次のような、いわ

ゆる Infinitivsatz もまた、異論の余地なく NA とみなさなければならぬから、まず第一に語形論的な問題が生じるわけである。

Alles wissen macht Kopfweh. (Sprichwort)

Schlangestehen, *aus nichts etwas, aus etwas viel machen, Heimarbeit zu der Hausarbeit übernehmen*, das alles war selbstverständlich. (Seghers)

上例のごときは、Kleinschreibung のままで、NA の特性を十分にもっているのであるから、名詞的語形を喪失しながらも、なお概念様式上は、やはり動詞概念を内包する名詞と考えなければならず、このことは、斜体部を *das alles* によつて指示している点からも明らかなのであるから、これら Infinitivsätze に広義の NA なる概念をあてても、決して不当ではなからう。また一方では、

Politik ist *ein praktisches Verhalten*. (Th. Mann)

における *verba infinita* にあつては、すでに動詞概念は失なわれ、名詞化 (Substantivierung) の過程が相当に進んでいるのであつて、このようなものは本来の NA には含まれ得ない。さらにこれに続く文脈中の、

……ein praktisches Verhalten, das sich *die Aufrechterhaltung oder die Umgestaltung des bestehenden Staates* zum Ziel setzt. (ibid)

では、二個の *-ung* 語尾の動詞派生名詞が、意味上の目的語を有し、行為を具象的に表現しているものであるから、これらは、純粋な NA とみなすべきものである。

それ故、一般に動詞派生名詞が NA であるか、あるいは、単なる *Nomen substantiae* であるかの別は、必ずしも、語形には関係なく、むしろ、機能的平面におけるその Substantivierung の程度いかに依存しているのである。つまり、その決定要因は、語形論のカテゴリーにはなく、ほとんどもつぱら意味論のカテゴリー内にあると言えよう。換言すれば、NA なる文法範疇は、語形論と文章論 (Syntax) との接点に位置しているのである。この場合 Syntax なる表現も、単に Satzlehre を意味するにとどまらず、Bedeutungslehre の領域を含むものとされなければならない。いわば、NA 論は、Bedeutungslehre の上に構築された Wort- und Satzlehre なのである。言語現象の宿命たる形式—機能—概念の各範疇間に在る矛盾撞着がある点で止揚され得るとすれば、NA の文法範疇は、まさにそのような一点なのである。であるから、文法体系中に NA の位置を求めるならば、語形論・意味論を超えた、ある高次のカテゴリーが要求されることになる³⁾。それは、J. Ries の表現を借りるならば、Bedeutungslehre von der Form der Wort u. Wortgefüge ともなるうか⁴⁾。

動詞派生名詞⁵⁾ が NA であるか、あるいは、単に *Nomen substantiae* にすぎないかを決定すべき基本的なメルクマールが、動詞概念の Substantivierung の進行度であり、また、その Substantivierung の諸階梯が、動詞派生名詞が NA から順次に単なる Substantive に移行する程度を跡づけるものであるとすれば、この Substantivierung をはじめ、後述の諸文法範疇は、すべて、上記の意味における “Mischsyntax” という文法体系を不可避の前提としなければならない。

本稿は、*Nomen actionis* がこのような文法範疇に位置するものとして、その基本的な性格の Schema を画いてみようとする、つたない試みである。ただ、浅学にして、遺憾ながら問題を Nhd. に限定しなければならない。今後を期す次第である。

註 1) M. Regula は、同書中随所でこの語を *nomina actionis* と言い換えているから、ほぼ同一の概念を予想

- しているものとみなしてよからう。ただし、Regula が Verbalnomina あるいは nomina actionis と呼ぶのは、主に verba infinita らしく、これは短見であろう。本稿の NA は、より広範な概念を予想する。
- 2) M. Regula ; Grundlegung und Grundprobleme des Syntax, 1951. S. 146.
 - 3) 関口存男氏の「意味型態論」もまたこのような要請に答えるものとして提起されたものと思われる。
 - 4) J. Ries : Was ist Syntax? Ein kritischer Versuche 1927. S. 81. Ries の言う Mischsyntax は、ここまでの拡張解釈を許すであろう。
 - 5) 動詞派生名詞には、NA とならび重要なものとして、Nomen agentis がある。これについては、別に稿を改め、本稿での言及は割愛する。

2.

2.1 NA の第一として、まず Substantivierter Infinitiv を挙げなければならない。もともと、Infinitiv は古代語動作名詞の格が凝結し、次第に動詞組織中に結合して、現在語幹からではなく、動詞語幹そのものから形成されるに至つて、本来の名詞的意義を除々に失ない、動詞的意義・用法に重点が移り、定形組織中に入り込むにいたつて、ついには、格支配の機能、時称、態の別を有することになつたものである。それゆえ、Infinitiv をもつて NA の第一に挙げるのは、それがもともと名詞としての機能及び意義を有していた点からして、すでに同義反復にすぎない。

Nhd. における Substantivierter Infinitiv の最も単純な型、つまり、何らの規定語をも伴わない類のものは、ことに Sprichwort 等に多く見出される。けだし、この型の NA が、動詞概念を最も簡潔直載に表現し得るからである。

Hoffen und Harren macht manchen zum Narren.

Probieren geht über Studieren.

Leihen macht Freundschaft, Wiedergeben Feindschaft.

Irren ist menschlich. Reden ist Silber, Schweigen Gold.

など多くをかぞえ得る。いずれも簡潔直載に行為が生まのまままで表現し得て妙である。Substantivierter Infinitiv は、この簡潔さゆえに、通常の散・韻文にも数多く見られること周知の通りである。一例を挙げるならば、

Behagt dir das Guillotiniere nicht,/So blieb bei den alten Mitteln,…… (Heine)

Des Maurers wandeln,/Es gleicht dem Leben,/Und sein Bestreben,/Es gleicht dem Handeln,/Der Menschen auf Erden. (Goethe)

Es gab ein Lärmen und Rufen. (Schnitzler)

Was sonst für ihm das Schwerste war, das Anknüpfen der Beziehungen. (Joho)

また、目的語や規定語が NA と合成されることもしばしばである。すなわち、
das Achselzucken war genug allgemein, (Th. Mann),

ein verwirrtes Durcheinanderreden, Hin-und-Herrennen の類である。だが、NA が心理的に名詞として意識されるが故に、adnominal な規定語を附すことの方が比較的が多い。たとえば、

ein ewiges Gehen und Kommen (Goethe) は、ein Ewiggehen und -kommen,

Kein Ausweichen mehr war (Hoffmann) は Nicht-ausweichen mehr war,

ein mattes Sehnen und Quälen (Schopenhauer) は、ein Matt-sehnen und -quälen にほぼ同義である。

Substantivierter Infinitiv は、もともと補定語として Akkusativ で用いられたものが基本的な用法らしいと言うり、それが後に急速にこの制約をはなれて、本来の名詞的性格から多様な型式を生じて行つたのであるが、今日でもなお、そのなごりが多く見出される。たとえば、殊に

gehen, kommen, bleiben などの補足語として、Kleinschreibung の Infinitiv が用いられているのは、この例である。spazieren gehen, baden gehen, umarmen kommen, hängen bleiben, auf derselber Stelle wandeln bleiben 等。また、現在、話法の助動詞と共に用いられている Infinitiv もこの用法の名残りである、これら Infinitiv の格が Akkusativ であることは推察に容易であるが、ことに、Infinitiv と gut haben, の結合においては、事情は一層明瞭となる。

つまり Er hat gut reden. Sie haben gut lachen. Der Dichter hat gut nach seinem Ideal arbeiten. (Schiller) 等である。一方、これらと同様の形式でありながら、

Ohne Frieden ist nicht gut fliegen. Aus der Ferne ist gut lügen. Muss ich gleich wider Willen denken ; der ist gut köpfen. (Goethe),

における gut (böse, schlecht) sein-Infinitiv にあつては、格の判定は困難である。

Substantivierter Infinitiv の Genitiv の用法もまた、極めて広い。während des Essens, laut seines Erachtens, trotz alles Widerstrebens などの Präpositionelle Bestimmung のある場合は Dativ, Akkusativ の前置詞規定による場合と同様に、特別な概念様式をもっているのので、後述することにして、ここでは、前置詞規定ならざる場合、しかも、ごく単純なものを選ぶとすれば、beim unendlichen Prozess des Schaffens, die Aufgabe des Denkens und Schreibens, die Kunst des Konzentrierens und des Weglassens などの類を挙げるべきであろう。これらは、動作等の動詞概念の具象的表現形式として、きわめて kurz und bündig な力をもつだけでなく、動詞概念が抽象的、かつ普遍妥当的であることが著しい特質をなしている。また、これと別に、人称規定を伴うために、このような普遍妥当性に欠けるが、興味深いものとして、Hier ist unseres Bleibens nicht. の類が挙げられよう。

Komm, meine Tochter ! Hier ist unseres Bleibens nicht mehr! (Schiller).

Wenn aber Wind nicht umschlug, so war seines Bleibens hier nicht, (Th. Mann)

のごとき Genitiv の Infinitiv-NA は、もともと nicht がかつて nichts であつた時代のなごりであり、あたかも genitives Subjekt に見える Bleibens はもともと nichts に対する genitive Bestimmung であつたものにすぎない。これとならんで、いわゆる 数量的二格を示すもので、kein, viel, wenig などと Genitiv の Infinitiv との結合がある。これらについても、この Infinitiv が元来、二格規定語であつた事情は同様である。例えば、

den Antikensaal, von dem viel Rumens machte. (Goethe)

Sie machte nicht wenig Aufhebens von sich und ihrem Unternehmen (Th. Mann.)

viel Redens machen, wenig Hinaustreten machen など。

また、mit dem Herren des Redens kein Ende ist, Seines Schweigens kein Dauer ist. などの kein Ende を結合する場合を考慮に入れると、これらの Infinitive が adnominal な二格規定であり、とくに前者においては、machen, haben の補足語が、いわゆる kristallisiertes immanentes Objekt (Akk.) であることが明らかである。

Infinitiv の二格については、Infinitivsatz の自由な二格用法が特記すべきものの一つである。この用法は、きわめて広範で、殊に Substantivierter Infinitivsatz との関係で重要なものでもある。たとえば

um den Lohn des Nichtmehrdenkenmüssens, unter dem Unstern des ewigen Noch-zu-jung-seins, während des langen Schlangestehens, Ziel dieses über-die-Jungen-Sprechens などその一例である。

Infinitivsatz がそのまま全体として NA の機能をもつことがある。一般に、Substantivierter Satz と称されるものには、

- a) “Helft mir! Helft mir!” erschreckte sie zum Entrinnen. の如く、引用符号を附した文全体が名詞化されたもの、
- b) dass などの接続詞に導かれた文、
- c) Zu を伴うか、あるいは伴わない Infinitivsatz、

が大別されるのは周知のことであるが、ここで問題となるのは、これらのうち、zu を伴わない Infinitivsatz である。つまり、この形の不定句が、語形的に中性名詞化されたものをもつて、本来の Infinitivsatz-NA をみなすべきであろう。たとえば：

Dieses Wachsitzen, Angekleidetschlafen, Nichtrauchendürfen im Grunde war das alles ein mechanischer Leerlauf, (Joho)……

drohte er mit Kreuzweisssschliessenlassen, Anspeitschen, Unterngalgenbegraben. (Feuchtwanger)

の如きものである。この種の Infinitivsatz では、相当に長い重疊的な表現も見られるが、極端に長いものは、もちろん、Wortschlange と呼ばれ排撃される。たとえば、

Sommerkinderferienlagerleitervorbereitungslehren ist sofort vorzunehmen. Sein Sozialversicherungskassenangestellter-sein など好事家のなぐさみにすぎないが、比較的長いものでも、das Ganzinsichgelassensein, das Drüberhinweghören, Sichbehagenlassen, Sichbequemenlassen, Nichtmehr-folgen-können の程度なら、日常用いられている。この種の不定形文においては、前綴、再帰代名詞はもとより、助動詞等まで一体として substantivieren され、態・時称があるままで、Genitiv にさえなる。また、Bindestrich の有無、分かち書きなども、もつぱら趣好の問題であるらしい。たとえば、Monat des Getriebenwerdens, Schule des sich überwindens, Tag ihren Eingesperrtseins 等である。

問題は、このような Infinitivsatz-NA に adnominal な規定語が附加される場合であるが、erst beim zweiten Sichunterdieaugenkommen, das lächelnde Geschehenlassen, das traurige Nichtmehreinandesehenkönnen, などの adnominal なる Bestimmung は、当該 Infinitivsatz の動詞概念全体を修飾していて、問題は起こらないが、仮りに、das traurige Nichtmehreinandesehenkönnen を das Nichtmehreinander-traurig-sehenkönnen とするとか、あるいは、das heroische Sichüberwinden を das Sich-heroisch-überwinden に、das unerwartete Sichwiederfinden-können, を das Sich-unerwartet-wiederfindenkönnen にする場合、あるいは、これらの形容詞を無語尾で副詞として附加する場合には、動詞概念にかなりの変化をもたらすことになる。つまり、与えられた Infinitivsatz-NA の動詞概念中に副詞的規定語の概念が包摂されるか、あるいは、一個の全体として与えられた動詞概念を、外部から、客観的に評価、修飾するかの別が生じるわけである。すなわち、最初の例で邦語を当てるならば、前者は、「あわれにも再会不可能」なのであり、後者は、「次回よりは、愉快に会おう」の意、「悲しげな会い方はもういらぬ」ということになる。したがって、たとえば、das heroisch Sichüberwinden の表現は、意味の混乱の可能性を含み、よくない。再帰代名詞の取捨もこの点に関係する。また特に、否定詞については、

das Nichtrauchendürfen, das Nicht-rechts-und-links-schauen, des Nichtmehrdenkenmüssen, das Niemalsdabeiseinkönnen などの nicht は、substantivieren される動詞概念に内包されてい

るのであり、他方で、Da gibt es kein Entrinnen mehr. Es half kein Schelten noch Schmeicheln. Es braucht kein Rechts-und-links-schauen. などの kein は、名詞化された動詞概念そのものが否定されているのであつて、この二者は厳格に区別されなくてはならない。

以上で考察した Infinitiv 及び Infinitivsatz の NA は、そこに表わされた動詞概念が、an und für sich に、極めて具体的に表現されているのを最も重要な特色とする。換言すれば、この型の NA は、konkrete Bezeichnung der Tätigkeit, des Vorgangs od. des Zustandes として機能するのである。この動詞概念がそのまま具象的に表現されるという特質は、Infinitiv の他の機能的用法と比べると一層明らかになる。たとえば、das Verhalten, das Essen, das Vertrauen, das Rauchen, das Hupen, das Trinken, das Einkaufen, das Rechnen など Infinitiv 型名詞は、具象的に動詞概念を表示する NA としての機能を一方では有しながら、他方、それぞれの動作、行為などに対する単なる呼称として用いられる場合もある。否、もともと、ほとんどの Infinitiv 型名詞は、この用法をもつて、本来の機能としていたのである。つまり、それぞれ邦語を当てれば、「態度」、「食事」、「信頼」等の意義で用いられていて、上述の NA の機能とは、同列に置くことは不条理であろう。これらは、いわば、Blosse Nennung für Tätigkeit, Vorgang, od. Zustände と考えなければならぬ。すなわち、動作等の動詞概念に対して与えられた「レツテル」なのであつて、動詞概念そのものを具象的に表示するのではない。本来の NA においては、動詞概念が an und für sich に表現されるに対して、この種の用法の場合は、その動詞概念が、観照的、客観的に捉えられ、動作等の様態が、種類区分を目的として、命名されているにすぎない。このような概念様式にある Infinitiv の用法はまた、決して少なくないのであつて、通常、不定形名の抽象名詞と呼ばれているものは、大部分がこの階梯の動詞派生名詞である。この種の動詞派生中性名詞は、本来の NA と厳格に区別すべきものであつて、大多数は、語形上の相異がないので、もつぱら、概念様式上のこうした違い、つまり Substantivierung の程度の差によつて識別しなければならない。性の異なるもの、例えば、das Gefallen, der Gefallen, das Schrecken, der Schrecken, das Braten, der Braten の如きは問題にならないが、語形的・品詞的な相異は、上述の“Mischsyntax”の立場に立つ限りで、常に二義的な役割をしか演じ得ないのである。

さらに、相当の数の Infinitiv 型名詞にあつては、一層の概念様式上の相異を生じ、本来の NA としての機能、つまり動詞概念の具象的表示でもなく、第二の、das Leben, das Sterben, das Verlangen など動作等の動詞概念に対する呼称でもない、第三の用法が生じてくる。

das Ansehen, das Schreiben, das Verbrechen, das Wissen, das Versprechen, das Herkommen 等の名詞では、本来の Infinitiv NA との近親性は、語形上、意義上明らかであるが、その概念の様式は、前二者と根本的にちがつて、それぞれ、das Angesehene, das Geschriebene, die Verbrochene Tat, das Gewusste (etwas zu wissende), das Versprochene, das Hergekommene の意義で用いられ、すべて当該の行為が完了した結果として与えられた Gegenstand を表示している。換言すれば、これら Infinitiv 型動詞派生名詞は Gegenstandsbezeichnung der vollzogenen Tätigkeit なる概念形式を有していると言えるのである。

このように、動詞派生の Infinitiv 型中性名詞においては、その概念様式の相異に着目するならば、次の三種のものに区分できる。

- a) konkrete Bezeichnung der Tätigkeit, des Vorgangs, od. des Zustandes

- b) objektive Nennung derselben
- c) Gegenstandsbezeichnung derselben

2.2 Infinitiv とならんで、NA が最も頻繁に、且つ単純な形で構成され得るのは、動詞語幹派生の名詞の場合である。

(der) Bruch<brechen, Drang<dringen, Floss<fliessen, Flug<fliegen, Gang<gehen, Klang<klingen, Pfiff<pfeifen, Schluss<schliessen, Sprang<springen

Stoss<stiessen, Trieb<treiben, Wuchs<wachsen 等,

また、不定形語幹を名詞化したものもこの類に含まれる。つまり、Ruf, Lauf, Fang, Halt, Spalt 等である。これら動詞語幹派生名詞は、そのほとんどが Gegenstandsbezeichnung に用いられる、いわゆる Nomen substantiae であり、本来の NA には、今日では比較的まれにしか用いられないが、これら名詞に前綴が附加されると、NA としての機能は俄然活潑になる。このことは、前綴がもともと副詞的規定語であつたのであるから、当然のことである。たとえば、以下の語は、本来の NA としての機能を有するものの一例にすぎない。

(der) Anruf, Aufstand, Ausbruch, Abstieg, Anteil, Freundschaftsbruch, Beschluss, Einfluss, Verlauf, Aufsprung, Vergleich, Zusammenschluss Versuch, Vorbeimarsch, Wortwechsel, Widerruf, Untergang usw.

これらは、本来 Tätigkeitsbezeichnung として用いられ、せいぜい動詞概念に対する呼称として使用されるにすぎず、対象化された substantiae たることはない。この点から、前綴付きの動詞語幹派生名詞は、Infinitiv 型 NA と、ほとんど等しい Substantivierung 段階にあるものとみなされる。この場合、objektive Nennung として用いられるのと同じの語が、それと異つた用法において、純然たる本来的 NA としての機能を有するにいたることが多く、つまり、各語が用法にしたがつて、異つた概念様式をとるのであつて、この傾向は、

- 1) もとの動詞の目的語に相当するものが、前綴化した場合、(Freundschaftsbruch, Wortwechsel Ozeanflug など),
- 2) 意味上の目的語を表示する前置詞が前綴化した場合 (Anteil, Ausbruch, Einfluss など),
- 3) もとの動詞概念に対する強い副詞規定語が前綴化した場合 (Aufruf, Aufstand, Vorbeimarsch, など),
- 4) be-, ver- 等の Perfektiv 化する前綴のついた場合に極めて強力である。

一方で、これらの合成語に、更に規定語がついた場合には、ほとんど例外なく、本来的 NA の機能を取得する。O. Behaghel が、NA の Kriterien は、当該名詞に附加される副詞規定語の有無であると言うのは、この点で正論である²⁾。

たとえば、Anteil an die Regierung, der vorläufige Abschluss, erster Ozeanflug, der kalte Wortwechsel など。

他方、単純に動詞語幹より生じた非合成名詞においては、たとえば、Bruch, : das Brechen. Gang : das Gehen, Sprang : das Springen などの如く、Infinitiv 型 NA がすでに形成され、使用されているために、これらとの競争上、本来の NA としての機能を取得することはなく、もつぱら、Nennung としての用法で満足しているのである³⁾。

次に、前綴 Ge- のつくもの、たとえば、Gebot, Gefecht, Geschoss, Gemisch, Geschenk, Geschei, Gesang, Gespräch, Geschwätz 等にあつては、大いに事情を異にする。動詞語幹派生

名詞に前綴がついた、他の多くの名詞と異つて、この類のものは *ge-* 前綴の *Kollektiv* に似て、もつぱら *Gegenstandsbezeichnung* に用いられ、本来の *NA* になることはない。いずれも、動作等の加えられた結果の対象物を示し、純粹の *Nomen substantiae* である。この点で唯一の例外をなすのは、音声を表現する若干のもの、*Geklingel*, *Gekrätz*, *Gemurre*, *Gepfeife* (場合により *Geschrei* も) あり、これらは、*Substantivierung* が未だ十分に進まない諸階梯にあり得て、*Nennung* 又は、規定語を伴うならば、動詞概念表示の *NA* になり得る。

2.3 *Suffix-ung* は *NA* を形成する語尾として、古くから最も広く用いられて来たものである。もともと、これらの名詞は、*Nominibus* より形成するものであつたが、次第に動詞語幹からの派生に広く用いられるようになったのである。だが、この型の *NA* は、二つの側から制約を受けている。第一は、*Infinitiv* あるいは、動詞語幹派生名詞などの、より単純な型の *NA* がすでにできている場合、及び、特に *Infinitiv-NA* が、文脈上きわめて強力に *NA* としての力を主張し得べき場合においては、*-ung* 型名詞は敗北をみる。第二に、一般に、この型の *NA* は自動詞からの形成はまれで、ほとんどが他動詞からの派生である点である⁴⁾。もつとも、自動詞からの派生も、ない訳ではなく、*Drohung*, *Handlung*, *Landung*, *Rechnung* *Steigung*, *Wallung*, *Werbung*, *Wirkung*, *Zögerung* 等の *tun* の意味型態に属す自動詞、及び、これらに、*Aktionsart* を転化させない種類の *Präfix* がついたものなどは、その例である。後者に属す合成名詞 *NA* はきわめて多数で、一例をあげるならば、*Abdankung*, *Anspielung*, *Entstehung*, *Ermangelung*, *Entsagung*, *Entweichung*, *Einwilligung*, などである。これはつまり、*Präfix* が、その自動詞に何らかの *Ergänzung* が附加されることを期待させるからに他ならない。

Suffix-ung の *NA* の大部分が、他動詞より派生し、従つて、他動詞的意義をもっている事情は、これらのほとんどが、それぞれに対応する別種の自動詞的意義の *NA* を有していることから、逆に確認できよう。二、三の例を挙げると：*Abschiessung-Abschuss*, *Abtretung-Abtritt*, *Einlegung-Einlag*, *Einreissung-Einriss*, *Entwerfung-Entwurf*, *Umschichtung-Umschicht*, *Umkehrung-Umkehr*, *Verschleifung-Verschleif*, *Verstossung-Verstoss*, 等である。また、この両者の関係については、*Suffix-ung* の *NA* が、大部分、*Substantivierung* の最初の階梯、つまり、*konkrete Bezeichnung der Tätigkeit* か、せいぜい、*Nennung* の機能にとどまるに対して、それに対応する自動詞的意義の名詞群は、多くが *Gegenstandsbezeichnung* として用いられている点に、きわだつた特色をもつ。

他動詞からこの型の *NA* が多く形成されることに関連して、再帰代名詞が、*Substantivierung* の過程で、*NA* 中に吸収される。すなわち、*sich entwickeln*→*Entwicklung*, *sich verändern*→*Veränderung*, *sich erschrecken*→*Erschreckung*, *sich verwundern*→*Verwunderung*, *sich bemühen*→*Bemühung*, *sich hingeben*→*Hingebung*, *sich stellen*→*Stellung*, *sich verwerfen*→*Verwerfung* 等がその一例となろう。この再帰代名詞の吸収は、*Suffix-ung* 型の *NA* の *Substantivierung* において、もとの動詞概念の *Aktionsart* に変化が生じることを意味する。その第一の変化は、*inchoative*, *kausative*, な *Aktionsart* が、*Perfektische* (*perfektive*) なそれに転化することであり、第二は、もとの動詞が *durative* (*od. imperfektive*) *Aktionsart* を有している場合には、これが *Perfektische* な持続状態を示す動作様態に転化する。換言すれば、もとの *Vorgangs- od. Tätigkeitsbezeichnung* であつたものが、*Perfektisch* な *Zustandsbezeichnung* に転化するのである。また、再帰代名詞の吸収が考えられない場合には、*genitives Objekt* を附

加するのが通例であるが、このときも、Aktionsart の変化が生じる。ただ、この場合には、単純に Zustandsbezeichnung への転化なのであつて、再帰代名詞を吸収した際に生じる、見かけ上の Handlungsart の変化は問題にならない。

前綴がつかないか、あるいは、ごく単純な前綴しかつかぬ Suffix-ung 型動詞派生名詞にあつては、Gegenstandsbezeichnung として Nomen substantiae にすぎぬものが大多数である。これらは、いわゆる動詞派生抽象名詞であるが、すでに対象化された動作対象そのものを示すことも少なくない。たとえば、Lieferung, Lösung, Mischung, Wohnung, Besetzung, Sammlung,

Schöpfung, Sendung, Siedlung, Meldung, Entfernung, Dichtung, Erscheinung, Übersetzung, などである。また、Leitung, Regierung の如き Kollektiv も生じる。

もとより、規定語がつく場合に、ほとんどが、konkret な概念様式を取得して、本来的 NA に転化されることは当然である。ここでもまた、動詞概念を明らかに想起させる規定語の有無が、本来的 NA に関する最も安全で、einwandfrei な規準となるのである。すなわち：

Aus Verdacht, nicht aus Verachtung *euer* ist's geschehen. (Schiller)

in Ermangelung *irgendeiner Münze* unablässig zwischen Fingern drehte, (Keller)

Mit einer *Hand-bewegung* machte er den Kameraden...aufmerksam, (Joho)

2.4 t-Endung の動詞派生名詞は、強変化動詞、あるいは、かつて強変化であつた動詞から形成された動詞語幹名詞であるが、現在では、もとの動詞がわからぬものも少なくない。これらのうち、最も頻繁に NA として用いられているものを挙げると、Ankunft (ankommen), Andacht (andenken) Brust (brunnen), Flucht (fliehen), Geburt (gebären), Jagd (jagen), Last (laden), Sucht (suchen), Sicht (sehen), Schuld (sollen), Pflicht (pflegen), Verdacht (verdenken), Wucht (wiegen), Zucht (ziehen) 等。これらは、Schuld, Pflicht, Brust をのぞき、多く動作等に対する呼称として用いられている。つまり、Nennung としての機能が圧倒的であるが、Andacht, Verdacht の如く、前綴がつく場合、あるいは、何らかの補足語が附加される場合においては、具象的な Tätigkeitsbezeichnung の NA の機能を得ること、他の動詞派生名詞と同様である。

Allgemeine *Sehnsucht* nach der sozialen Gerechtigkeit... (BGB)

Sprach er das Recht und ohne *Furcht* der Menschen (Schiller)

Ihre *Zusammenkunft* war geheim (Seghers)

その他の用法においては、Verbalabstrakta (Abstraktum) となるものが大部分であること言うまでもない。

2.5 a 語幹, n 語幹動詞派生女性名詞については、前者がかつて、NA として、後者が Nomen agentis として用いられ、その後、次第に Bezeichnung für leblose Gegenstände に用いられるいたつた⁵⁾ のであるから、その多くのものが、今日なお NA としての機能を有しているのは当然である。ただ、現今では、このうち何らの前綴、及びその他の規定語のつかない非合成名詞は、特に、後述の如く、genitives Subjekt od. Objekt 等をもたぬ場合を除外すれば、単なる objektive Nennung の抽象名詞であるにすぎない。たとえば、

Bitte, Eile, Fliege, Folge, Frage, Gabe, Klage, Lage, Liebe-, nahme, Pflege, Rache, Sage, Sprache, Strafe, Schwinge, Winde, Zwinge などである。

これらもまた、前綴、殊に Subjekt-Prädikat-Gestaltung を暗示、あるいは明示する補足語がつくと、Tätigkeitsbezeichnung としての、本来的 NA の機能を活潑にする。一例を挙げると、Anleihe, Ausfliege, Anfrage, Hingabe, Mithilfe, Ein, Aus, などと nahme, Aufeinanderfolge, Zusage, Aussprache, Niederlage などにあつては、それぞれの語の Infinitiv 型 NA とほとんど同様の力を有すほどの機能をもつ。

Unter Bezugnahme auf ihre Anfrage teilen wir Ihnen mit, ... (Briefe)

auf der Suche nach einer Arbeit, ihre Anklage wegen Diebstahls, die Nachfrage nach billigeren Waren などがその例となろう。

また、この女性名詞の造語法に従つて形成された外来語も、その機能は、この型の名詞に準ずることになる。これらの場合には、前綴がつくのがむしろ例外的で、たとえば、Aufrevolte, Einblockade などは、少数でもあり、且つ、Gutes Deutsch という観点からも好ましくない。それ故、この類のものは、もつぱら Tätigkeitsbezeichnung の抽象名詞 (Nennung) とみなして、さしつかえないであろう。

2.6 Suffix-nis を有する中性・女性名詞について。これらは、Ahd. まで、中性・女性の語尾にちがいがみられたが、現在では、その区別はすでに消滅してしまつている。また、派生に関しても系譜はさまざまであつて、

a) 動詞派生のものは、Bedrängnis, Bedürfnis, Besorgnis, Ereignis, Erfordernis, Erlaubnis, Ersparnis, Fördernis, Gelöbnis, Hindernis, Säumnis, Versäumnis, Verhängnis, Verzeichnis, Vorkommnis, Wagnis などで、特にこれらの前綴を有する語は、本来的 NA としての機能は活潑で、その程度は、Suffix-ung に劣らない。補足語をもたぬ場合においては、ことに前綴のつかぬ裸のものは、Nennung として用いられるのもつて原則とすと言えよう。しかし、Bedürfnis nach Arbeit, ihre Besorgnis um meine Gesundheit, nach Erfordernis der Umstände, ohne (mit, など) Hindernis, ohne Versäumnis, などは、十分に NA と考えられる。

b) 形容詞派生の語、Fäulnis, Finsternis, Geheimnis Gleichnis, などは、もつぱら, Eigenschaftsbezeichnung としての nomen substantiae と考えてよく、本来的 NA とは概念様式を異にする。なぜなら、本来の NA 形成においては、当該動詞概念の Substantivierung がそのメルクマールをなすのであるが、形容詞派生の諸名詞類の場合には、属性概念の Substantivierung の系列か、あるいは、属性表示 (Eigenschaftsbezeichnung) を経て、Zustandsbezeichnung に転化したものの Substantivierung かのいずれかの道を通つて、きわめて高い階梯の Substantivierung にある名詞が与えられからであり、そこで表示される概念様式は、後述、-tum,-schaft, heit,-keit 語尾の名詞のそれと同様で、大部分の用法では、Eigenschafts-bezeichnung である故である。ただし、この場合も、genitives Subjekt の附加で、たとえば、Geheimnis が das Geheim-sein の意義で用いられるかなり多くのケースでは、本来的 NA の臨界現象と考えなければならぬ⁶⁾。一方で、Fäulnis と Faulheit, Finsternis と Finsterheit, Gleichnis と Gleichheit では、それぞれ個有の意味をもち、いずれも、Eigenschaftsbezeichnung の Abstraktum である。

C) participium adjectivum, 又は Infinitiv より派生した Suffix-nis 型名詞は、もつぱら Zustandsbezeichnung である。けだし、pa は、完了又は受動の状態を表示する、動詞派生形容詞で、その機能も、Eigenschaftsbezeichnung としてより、むしろ Zustände を表示することを主たる機

能としているのであるからである。この類のものは、Zustandsbezeichnung としての、本来的 NA となるか、objektive Neunung となるかのいずれかで、Substantivierung の階梯からすれば、Suffix-ung と比べて劣らない。これに類するものを若干数挙げれば：

Gedächtnis, Bekenntnis, Vermächtnis, Gefängnis, Empfängnis, Verhältnis, Begebnis, Ergebnis, Begängnis, Geständnis, Verständnis などである。

d) 名詞から派生したと思われるものでは、Bildnis, Bündnis, Aergernis, Schrecknis, Erträgnis などがあるが、その形成の事情は必ずしも一様ではない。また、概念形式上も、たとえば、Bildnis においては、Abbildung のような Gegenstandsbezeichnung として用いられながら、一方では、もともと動詞概念を取得することはない筈であるにもかかわらず、bilden に対する substantiviertes Nomen の如く意識され、逆に Abbildung よりも強い動詞概念を表現し得る。また、Bündnis では、Bündnis < Bund < binden の転化過程を想起させ、動詞派生名詞と同様の、本来的 NA としての機能をさえ取得する。もちろん、Präfix との結合の場合は、この機能は促進される。その他の名詞、Aergernis, Schrecknis についても事情は同様である。

Suffix-nis 型の名詞においては、したがって、a) 動詞語幹派生、b) participium adjektivum 又は Infinitiv 派生名詞において、本来的 NA になり得るものを相当数含み、殊に前置詞により規定されるか、補足語等が附く場合には、そのほとんどが——Suffix-ung 型 NA との対抗上、NA としての機能取得に敗北した Gegeustandsbezeichnung のものを除いて——本来的 NA としての機能は促進される。一方、c) 形容詞派生の類では、H. Jespersen の表現による⁶⁾、predicative substantiae であり、Eigenschaftsbezeichnung となる場合は、NA が本来的に動詞概念（種々の様態にある perfektiv 又は imperfektiv の動詞概念を含む）を表示するという規準を立てるならば、NA 文法範疇とは別個のものであり、他方、Zustandsbezeichnung となる場合には、NA の臨界現象として扱えられる。最後に、d) 名詞派生では、基本的に Gegenstandsbezeichnung の Nomen substantiae であるが、これも、当該の名詞からの派生動詞を想起させるごく限られた用法に関しては、NA としての機能を取得する、性の別の動揺は、現今に至るも、続いているが、Erkenntnis の如く、性によつて、それぞれ個有の意義を取得しているものもある。

2.7 Suffix-ei の名詞について。Suffix-ei は外来語の語尾である。この類の名詞は、もともと、種々の Nomen agentis より形成されたものであつて、

a) Malerei Schreibung, Fischerei, Plündererei, Wortklauberei, Kriecherei, Lauferei, Betrügerei, Tanzerei, Lügerei, Liebhaberei, などは本来の Nomen agentis より転じて、Berufsbezeichnung に用いられている。それ故、これらは、もともとからすれば、NA とは異つた文法範疇に属すべきものであるが、職業種表示の機能より再転じて、習慣的、反復的行為、性癖などを表現するのに用いられると、この点で本来的 NA の領域と接触して来る。ただ、この場合でも、行為表象として、Tätigkeitsbezeichnung であり、補足語、とりわけ genitives Subjekt ob. Objekt の附加以外では、本来の NA としては用いられない。これは、その他の型の NA との競争場裡で決められることである。もつとも、この数の名詞が、反復的行為、性癖を表わすことから、行為に対する蔑称としての用法を得、この意味で用いられる場合には、他の型の NA と同じ強さで自己を表現することになるうり。

b) Bäckerei, Buchbinderei, Drechslerei, Färberei, Spinnerei, Weberei などの職業表示にもつぱら用いられ、a) で言う再転化を行なわないものも多く、一方で、

c) Bäckerei, Malerei, Schreiberei にあつては、行為の結果与えられたものを表現し得る。

-el 語尾の名詞、及び、-eln で終る動詞より派生した -elei 語尾の名詞は、Betterei 型名詞の類形成の所産であるが、NA としての機能は、動詞派生名詞である故、かなり強い。この場合も、規定語の附加は、この傾向を促進する。二・三の例を挙げると、Bettelei, Andächterelei, Duselei, Gankelei, Häcke'lei, Liebelei, Schmeichelei, Spöttelei, Trödelei 等である。

8.2 -tion,-ierung 語尾は、外来語 NA 形成の一般的語尾である。これらは、もともとラテン系語の NA なのであるから、ドイツ語もこれを NA として輸入した訳であり、その意味では、ドイツ語においても、これらは NA であること当然である。だが、注意すべきことは、ドイツ語の Lehnwörter としては、同一のラテン語語幹に、-tion と -ierung の二様の名詞化語尾が附加され、しかも、その際に、それぞれに概念様式上の相異が現われる点である。つまり、本来のラテン語語尾-tion を附したものは、平常の用語では、行為表象として、objektive Nennung の、いわゆる抽象名詞であり、他方で、-ierung 附加の場合には、本来的 NA の機能を取り、Tätigkeits-, Vorgangs-, od. Zustandsbezeichnung となる。二・三の例を挙げると：(前者は行為表象、後者は NA)

Affirmation→Affirmierung, Deklination→Deklinierung, Elektrisation→Elektrisierung, Negation→Negierung, Realisation→Realisierung, Akkumulation→Akkumulierung, Expansion→Expandierung, Mobilisation→Mobilierung (Mobilmachung は合成語としてはなほだ興味深い), Korrektion→Korrigierung, Sozialization→Sozialisierung,

その他, Studie→Studie-rung, などを含めて、外来語語幹に、-ieren 動詞語尾を附したものが、NA に再転した型の名詞がこの型に分類できる。

2.9 -tum,-schaft,-heit,-keit 等の Suffixe の場合においては、そのほとんどが、Gegenstandsbezeichnung か Eigenschaftsbezeichnung である。それぞれについて、特徴的な語を拾うと、

a) -tum に関しては、Irrtum, Wachstum が動詞派生名詞と考えられ、Tätigkeits-, Zustandsbezeichnung か、あるいは Nennung, に用いられる少数の例外である。ただし、Irrtum は、nomen substantiae として、Gegenstandsbezeichnung の用法が普通である。規定語、あるいは、人称の規定が附加されて、NA となり得るのも、他の型の動詞派生名詞と同様である。

b) -schaft においては、形容詞からの派生と思われるにもかかわらず、本来の NA として頻繁に用いられるものに Herrschaft がある。また、participium adjectivum からの派生語、Bekanntschaft, Errungenschaft, Gefangenschaft, Verwandtschaft などはそれぞれ、perfektisch (perfektiv) な動作様態で、Zustandsbezeichnung である。さらに、名詞からの二次的派生語では、Mitleidenschaft, Machenschaft, Wanderschaft (これは agentis, Wanderer よりの転化)、Anwartschaft などが、状況表示語として、NA の概念範疇に加えられる。だが、補足語のつかぬ、単独の場合には、その Substantivierung の程度は、行意表象 (Nennung) か、Eigenschaftsbezeichnung かのいずれかである。

c) -keit 語尾のものでは、i) 名詞から、ii) 形容詞から、iii) participien からの派生に大別できる。共に主として、Eigenschafts-bezeichnung であるが、-tum 語尾の名詞と同様に、状況を表示する場合で、特に、genitives Subjekt (Personalpronomen を含めて) など規定語の附加で、本来的 NA となり得る。また、分詞からの派生は、状態受動 (動作様態は perfektisch である

が)の概念様式を与え、NA になりやすい。たとえば、Besonnen-, Gebunden-, Verworren-, Be-
liebt-, Gewandt-, Verstockt-, Versagt-heit などである。

d) keit 語尾では、もつばら、形容詞派生名詞であるので、NA とは、殆んど関係なく、Ei-
genschaftsbezeichnung の領域にある⁶⁾。

註 1) H. Paul, Deutsche Grammatik. 1958. Bd. IV § 326

2) O. Behaghel, Deutsche Syntax 1932. Bd. II. § 739

3) 動詞語幹派生名詞の発生過程とその種別については別に稿を改める所在である。

4) 自動詞、他動詞の別は、もつばら概念様式上の区分とする。つまり、Akkusativ-Objekt のみならず、
Genitiv, Dativ にある補足語、及び前置詞を介す補足語も、この点で他動詞の範疇に加える。ただし、一
個の動詞が自動詞か他動詞かの別は。ことに前綴の附加を考慮に入れるならば、まつたく、ケース・バイ・
ケースであり、このような考察の場合、特に、一義的に決めることは、全く不可能だからである。

5) H. Paul, Deutsche Grammatik. 1920 Bd, V § 58.

6) O. Jespersen, は、nexus substantive なるカテゴリーを立て、これを verbal substantive と predicative
substantive に分けている。ここで問題とする型の名詞は、この分類による後者であるが、こうした分類
には、二つの疑念が生じる。すなわち、i) copula 等が媒介する形容詞—その他の詞の場合は度外視する
として—が、Eigenschaft を表現する場合と Zustände を示す場合があり得(この区分も対極的な概念を
問題にするのであつて、臨界点が不分明であるのは当然であろう)、後者が、一般の動詞概念と、kategorisch
に同一の概念構成をもち、前者が属性概念を示すという点で、後者は、本来的 NA カテゴリーの限界線上
に、前者が、臨界的現象であるとされなければならない。ii) participium adjectivum は、perfektisch
な、あるいは、passiv な概念様式を有しつつ、本来的 NA カテゴリー内に含まれる。従つて、O. Jes-
persen の nexus, predicative substantive なるカテゴリーは、不十分のそしりをまぬがれない。

cf. O. Jespersen, Philosophy of Grammar, 1924 chap. 10

7) 遺憾ながら、この用法の文例は、寡聞にして発見できなかつた。御教示をお願いしたい。

3.

以上、種々の語形の NA 及びこれに関連して、動詞派生名詞の諸類型について、概観してきた
のであるが、これまでの考察で与えられた、さし当つての結論は、次の通りである。

一般に、NAと動詞派生名詞に関して、上述の“Mischsyntax”の文法範疇たる Substantivierung
とその程度が、あらゆる考察の第一義的な Leitfaden をなすことは、すでに見たとおりである。
Substantivierung そのものは、諸種の派生名詞を問題とする際に、語形論上の区分からも導入さ
れざるを得ないが、Substantivierung の程度、あるいは階梯という概念は、従来、特に Sub-
stantivierter Infinitiv に関連して言われて来たにすぎない。すなわち、Infinitiv が名詞化する過
程で、

Einige, die mir nachzusehen die wenigste Mühe gekostet haben.

Dir widerstehen, heisst den Kampf mit Gott.

Das nenne ich arbeiten. よりは、

Geben ist seliger denn Nehmen, Selberessen macht fett, durch Schweigen, ohne Zögern,
im Reden und Schreiben, durch Wassertrinken などが、より substantivieren されており、
他方、冠詞、代名詞、形容詞が附加されると、その Substantivierung の程度 (Grade) は一層進
むものとされたのである⁷⁾。この場合の、Substantivierung の程度というのは、つまり、Klein-
schreibung か Grossschreibung か、あるいは一般に名詞的特性を示す外形的特徴——冠詞、代
名詞、形容詞の附加のごとき——を有するか否かによつて、その発展の過程のメルクマールとな
しているわけである。問題が substantivierter Infinitiv である限りで、この意味での Substanti-
vierungsgrad という概念は、有効であろう。なぜなら、Infinitiv の Substantivierung にあつて

は、その段階が、細分されて、語形論的にも、Satzlehre という観点においても、その転化の過程を跡づけることが可能であるからである。

den Brief, der neulich beizulegen vergessen wurde...(Schiller) の如き zu を伴なう Infinitiv から das heisst leben の如く zu を伴わないものを経て, Grossschreibung となり, さらにこれらに, 冠詞が, 前置詞が附加されるという状況は, 明瞭に Substantiv への転化過程を illustrieren しているのは, 確かである。だが, ここで Infinitiv より派生したと考えられて, しかも語形が Infinitiv と同じ型の名詞に関して考えてみるに, 発展転化段階を示す Substantivierung の程度, つまり, 狭い意味での Substantivierung の高段階にある冠詞付きの substantivierter Infinitiv などが, その置かれた文脈の中で, それぞれ異つた概念の様式を取得するのをみる。つまり, beim Essen, zum Einkaufen gehen, das wütende Hupen des Autos, beim Gemeinsamtrinken, などの NA——これは, 前述の如く, 極めて具象的な動詞概念を表示してしているが——と, 単独の das Essen, das Einkaufen, das Hupen, das Trinken などとは, 概念の様式を異にし, さらに, das Essen については, 「食事」の意義に用いられる一方, 「食物」の意味をとり, 動作対象をも示し得る。つまり, かなり多数の Infinitiv 型の名詞に関して, 一定の文脈中にあつて, 以上三種の相異つた意味の様式をとり得るのであつて, このような観点に立つと, 動詞概念の Substantivierung なるものは, Paul の言う, 語形的な, あるいは, Satzlehre 上の転化過程を示す概念として把えるよりも, むしろ, 以上の如き, 動作・行為, 過程・状態等の動詞概念の概念様式上の変化を包摂する範疇と考えられるべきである。換言するに, Substantivierung 文法範疇は, 当該動詞派生名詞が一定の Satzglied 中にあつて採り得る概念様式(意味の形態)の転化を包摂するのであつて, さきに, Infinitiv-NA に関して述べた際に指摘した, 三種の階梯, つまり, 1) konkrete Bezeichnung der Tätigkeit, u. a. 2) objektive Nennung (od. Anschlag) der Tätigkeit, u. a. 3) Gegenstandsbezeichnung der vollzogenen Tätigkeit u. a. が, それぞれ, Infinitiv 型名詞の Substantivierung 過程の里程標を与えるのである。

H. Paul の言う Substantivierungsgrade という概念は, では, どこに位置づけるべきかという点に関しては, Paul 自身が語っている。すなわち,

Weiter geht die Substantivierung, wenn dem Inf. ein Art., ein Pron od. ein Adj. beigefügt wird……Bei diesem Grade der Substantivierung wird von dem Inf. wie von einem andern Subst. ein Gen. abhängig gemacht……Es verhält sich in Wirklichkeit damit so, dass ein von ihnen abhängiger Gen. ursprünglich Gen. objektivus ist, aber nach vollendeter Substantivierung nicht mehr als solcher empfunden wird.²⁾

本稿でいう, 動作等に対する単なる呼称にすぎぬ動詞派生名詞の概念様式をもつて, Substantivierung の完了とみなしていることは, 以上で明瞭である。すなわち, Paul の言う Substantivierung は, 本来的 NA 形成の段階だけを細分し, その転化過程を illustrieren すべき概念である。それ故, このような概念規定の不十分さは, 次の三点にあらわれることになる。

- i) Substantivierung 階梯を Tätigkeitsbezeichnung から Gegenstandsbezeichnung に至る一連の過程として把えていないこと。
- ii) ほとんどいかなる規定語をも伴わない本来的 NA と, 人稱的規定, Gen. objektivus を含む Substantivierter Satz 形成の中核となる種類の NA との間に, 存する “mischsyntaktisch” な相異をみのがさざるを得ないこと, (後述)
- iii) Infinitiv 型名詞に関しては, かなり明白に把え得る Substantivierung 転化過程の基準も,

他の型の NA——一般に動詞派生名詞——にあつては、析出不可能であり、従つて、この概念は、基本的に Infinitiv NA 形成にしか妥当性をもたなくなつてしまうこと。

従つて、本稿では、Paul の Substantivierung を Infinitiv NA 形成に至る転化過程を例証する局所的な文法範疇と捉え、これを避け、Substantivierung を、動詞派生名詞一般の、Substantive に至る全転化領域を包摂する広義の範疇にまで拡大する。この際同時に留意すべきことは、Substantivierung をこのようなものと規定する限りで、論理の Leitfaden はいきおい、前述の、mischsyntaktisch な意味での特殊文法範疇である「概念の様式」、あるいは、意味構成の文章論的諸類型たらざるを得なくなる点である。以上の点を整理補足するに、動詞派生名詞一般——二・三の名詞派生、形容詞、分詞派生名詞を含む——の Substantivierung を、概念型式上分類するならば、次の三階梯に分かたれる。

i) 本来的 NA の機能を取得する konkrete Bezeichnung der Tätigkeit, des Vorgangs, od. des Zustandes の階梯。

substantivierter Infinitiv は無条件でこの機能を取得し得る。動詞語幹形成の名詞、Suffix-ung 型、外来語語尾 -ierung の名詞では、前綴の附加以上の展開、つまり、前置詞、人称代名詞、形容詞、Gen. subjectivus od. objectivus の附加によつてこの機能を得る³⁾。その他の派生名詞にあつては、少なくとも、前置詞、又は人称規定を伴なつてはじめて、本来的 NA たり得るにすぎない。

Substantivierung のこの段階で、動作等の動詞概念は、具体的に、an und für sich に具象化され、動詞概念が、その Dynamik をよく保存したままで名詞化される。これは、Substantivierung の最も primitiv な段階である。それゆえ、名詞化の程度という観点からすると、この機能は、動詞概念の保存という点で、その最初の階梯にあると言える。ここで、動詞概念は、具体的に、生き生きと、簡潔直載に保存されるのであるから、この Substantivierung の段階を、第一階梯と呼ぶことにする。名詞化第一階梯にある語の機能及びその意味の形態を、誤解を怖れず邦語すれば、「～スルコト」、「～タルコト」の意味に考えて、基本的に正当と言えよう。

この本来的 NA が、動詞概念の具象的な表示であることから、当該動詞の動作主体及び客体が補足的に NA に附加されるのは極めて当然のことである。Gen. objectivus. od. subjectivus の附加はもとより、人称規定を伴なうものが多く、それに至らないまでも、前置詞の規定によつて動作主体を暗示する場合も多い。このような規定語を伴なつた NA は、すでに動詞概念の具象的表示たるにとどまらず、Substantivierter Satz として、Subjekt-Prädikat-Gestaltung を内包すると言える。つまり、無規定の NA が、動詞概念を普遍妥当的なものとして、すなわち、動作主体等を明示、あるいは暗示せず、一般的に表示するに対して、これらの規定語は、その動詞概念を、人称化、即ち、特定化せしむる機能を有するのである。無規定の NA から、このように人称的规定を伴う Substantivierter Satz の中核となる NA までの推移もまた、一定の段階を有す一連の連続した過程である。この過程は、しかし、Substantivierung 過程とは別の系列に属し、いわば、Substantivierung 過程を縦軸とすれば、これは横軸の展開をなしている。これについては、次項、第 4 項以下で述べることにして、本稿では割愛する。

ii) 一般に、動作、行為等を示す抽象名詞と呼ばれる段階。

これは、Substantivierung という観点からすると、第一の階梯より一層進んだ段階であつて、

第一の階梯の名詞化が、動作等の動詞概念の具体的表現であるに対して、この、第二の階梯にある動詞派生名詞は、当該の動詞概念に対する、単なる呼称にすぎない。従つて、本稿では、この Substantivierung の段階を objektive Nennung für die Tätigkeit, den Vorgang, od. den Zustand と呼ぶことにする。

この段階では、すでに、dynamisch な動詞概念の表示はもはや求められず、この階梯にある動詞派生名詞は、statisch な Abstraktum であるにすぎない。しかしながら、第一階梯から、この第二階梯への移行は、連続した過程であるから、その途上には、種々の中間型態がみとめられる。かりに Infinitiv 型名詞に例をとれば、an jn. Vertrauen haben, js Vertrauen gewinnen, jm Vertrauen schenken における Vertrauen は、dieses Vertrauen auf einem fremden Massstab. Vertrauen machte uns geneigt, における場合より、一層 Substantivieren されているが、これらをもつて、明白に第二階梯の Nennendes Wort とは断定できず、それ故、これらは、この過程の中間段階と考える外はないであろう。このような事例は、その他の動詞派生名詞についても、考えられる。

この階梯に多くの名詞を属せしめているものを挙げるならば、Infinitiv においても、殊に das Verhalten, Vertrauen, Rauchen, Trinken, Rechnen, Einkaufen などの定冠詞を有す、かなりの数の名詞が含まれよう。また、語幹派生名詞以下、種々の Suffix 私をもつ前述の各名詞は、Präfixge を有するものを除けば全てがこの階梯の Substantivierung 段階にある行為呼称として用いられる。

iii) Substantivierung の最後の階梯。

Gegenstandsbezeichnung des Verbalbegriffs. この階梯で Substantivierung は終結し、動詞派生名詞は、本来の動詞的概念を失ない、単なる nomen substantiae に転化する。この階梯の特色は、本来の動詞概念の作用を受けた結果として得られた「もの」あるいは、結果として与えられるべき「もの」が表示される点である。たとえば、das Verbrechen は die verbrochene Tat を das Schreiben が das Geschriebene を、また、Entwurf が das Entworfenene, Mischung が das Gemischte を示すが如き場合である。すなわち、この階梯の Substantivierung は、いわば、Objktivierung とも言うべき、Gegenstandmachen を主たる特徴としている。

この階梯に属すべき語、及びその用法を最も多く有する動詞派生名詞は、第一に Präfix ge- を有す動詞派生名詞、第二に、外来語 Suffix- ion 型名詞である。これにつづいて、Infinitiv 型名詞をはじめ、外来語 Suffix- ierung 型名詞を除く全ての動詞派生名詞が、この、最終の Substantivierungsgrade に至り得る。

それ故、ほとんどの動詞派生名詞は、第一階梯から第二階梯を経て、第三階梯に至る、Substantivierung の過程を経過し得るのであつて、同一語においても、その含まれる文脈上の機能に応じて、三様の姿態転換をなし得るのである。そして、この姿態転換において、各名詞の意義に相異をもたらすものは、当該名詞の動詞的概念様式に加えられる Substantivierung の強度に他ならない。

以上のべた動詞派生名詞が、その Substantivierung の進行の各階梯で示す概念様式の変化を、schematisch に画くならば、次のようにならう。

Substantivierungsprozess

1. 第一階梯：Konkretierung を特色とする。

機能： konkrete Bezeichnung des Verbumbegriffs in verschiedener Aktionsarten.

2. 第二階梯： Nominierung を特色とする。

機能： Objektive Nennung des Verbumbegriffs

3. 第三階梯： Objektierung を特色とする。

機能： Gegenstandsbezeichnung des Verbumbegriffs

この三階梯中、本来的 NA の機能を有するのは、第1階梯の Substantivierung 段階にある動詞派生名詞である。また、すべての、上述の動詞派生名詞は、以上三階梯の一つあるいは、それ以上の機能を有し得、この一連の Substantivierung 過程中のどこかにその位置を占める。(未完)

以上、紙幅の関係で、NA に関する一般的考察の一部となるべき拙稿を—まず擱筆する。次号においては、ここで考察した Substantivierung 過程の横軸となるべき、NA の人称化、Substantivierter Satz への転化過程に関する部分について、つたない考察をつづけたい。種々の点での、大方の御教示をお願いする次第である。

註 1) H. Paul : Deutsche Grammatik, 1958 Bd. III § 356-358

2) ibid : § 358

3) NA に関する冠詞規定の役割については、関口存男著・冠詞, 1962. Bd I. 4. 5. 6 章参照